

巖 善平 著

『中国農民工の調査研究—上海市・珠江デルタにおける
農民工の就業・賃金・暮らし—』

晃洋書房, 2010年12月, 280p

近年、中国出身の優秀な研究者による研究成果を数多く目にするようになったが、本書の内容も大変興味深い。本書の主題である中国「農民工」は、計画生育とその効果（人口抑制など）および課題（少子高齢化や出生性比の問題など）などと並んで、中国人口学会における重点テーマの一つに挙げられている。中国国内でも農民工に関する調査研究の成果が数多く発表されているが、それらを含む最新事情を日本語で読み知ることができるというだけでも極めて高い価値があるように思われる。著者は中国で経済改革開放が始まり人口の動きが活発になり始めた1980年代後半から流動人口およびその労働力について分析を続けている、当分野での第一人者である。

本書では、著者が中国で実施に携わってきた複数の実地調査の分析結果の考察、およびその他の調査結果との比較を通じて、中国農民工の特徴が多角的に分析されている。農民工の属性等にみられる特徴を、農民工と（上海市等）都市戸籍保有者との比較や農民工内での差異の検証を通じて明らかにしている。アンケート・ヒアリング調査の個票から、年齢、性別、配偶関係、学歴、共産党員か否か、農業戸籍か非農業戸籍か、戸籍所在地、就業先の業種や企業規模等の変数を用いた定量的な分析結果が示されており、資料的価値は高い。

ただし、本書だけでは中国農民工の全体像がみえにくい。本書で用いられているアンケート・ヒアリング調査から得られるマイクロデータには、サンプルサイズの制約や調査間で対象者や質問項目・内容に違いがあるなど、比較分析には課題があるように思われる。また、本書で用いられている調査の多くは、調査時に対象地区（上海等の大都市）に滞在する（残留する）人たちのみを対象としていることから、すでに戸籍所在地に帰郷した人たちや他の都市に転出してしまった人たちを含めた農民工全体の特徴とは断定しにくい。調査時に滞在する農民工に属性等の偏向がみられないか気になるところである。本書の調査対象である上海市および珠江デルタという地域特性が農民工の特徴にも反映しているのか、あるいは中国全土の農民工に共通してみられる特徴と解釈していいのか、判然としなない。ただし、そのような留意点については本書内でも指摘されており、著者が書かれた他の関連書籍や論文ではより包括的な解説がなされている。著者の主張を理解するには、本書で取り上げられている参考文献などの併読が必要かもしれない。

“求職する際の部門選択や転職に見られるそうした差異は個々人の能力や努力というよりも、戸籍制度をはじめとする制度差別が強く作用した結果である（p59）”、“農民工は主として労働市場の底辺に留まっているのである（p169）”“暫住人口なのだから、戸籍住民のみを対象とする多くの公共サービスを彼らが受けられず、農民工はまるで二等国民のようだった（p172）”など、本書各所に著者の強いメッセージが盛り込まれている。中国農民工の問題は、単に農民工に対する処遇の問題に留まらない。根本的には現代中国の農村、農業の問題、地域間格差の問題、その中には著者の指摘する固定された戸籍制度の問題も当然含まれる。中国の社会構造に起因する現代の社会問題のなかでも、農民工という現象は極めて象徴的である。今後の研究の更なる発展に期待したい。（佐々井司）